
鈴の音

夜代衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴の音

【Nコード】

N9657K

【作者名】

夜代衣

【あらすじ】

主人公・鈴音レナが、初音ミクのソフトを使おうとすると・・・
な、なん初音ミクがパソコンから飛び出した！！？
レナとミクの日常物語

初音の出会い（前書き）

ボカロ系の作品かいてみたかった

ちよつとした物語です

初音の出会い

私の名前は鈴音^{すずね}レナ。

年齢16歳、160センチ45キロ。

高1

髪色は黒。

それをツインテールにしている。

それから

好きなことは 唄を歌うこと。

嫌いなことは 唄を歌うこと。

好きだけど、私の声が嫌い。

だって、音痴だもん……。。

ピンポーン

「はい」

インターホンが鳴って、出る。

「宅配です。ここにサインお願いします」

「あ、はい」

ボールペンでスラスラ書いていく。

「はい、ありがとうございましたー」

扉を閉じると、小包を持ってリビングへ。

「お母さん、やっと来たよー!!」

「ふふ、よかったわね。早速開けてみたら?」

「うん!」

私はカッターで封を切り、中のものを取り出す。

「やったー!!初音ミクだ!!」

そう、初音ミクのソフトだ。

これは私が高校受験に受かったご褒美になって母さんが買ってくれた。

「早速やってみよーっと!母さん、パソコン借りるねー」

「はいはい」

二階に上がって書斎に入り、ソッコーでパソコンの電源をつける。

そして、初音ミクのソフトを入れた。

「アレ？」

急にパソコンの画面が光りだした。

「え？嘘？何？え．．．ええええええええええ！！？」

余りの眩しさに、腕で目を覆う。

その時だった。

私の上に何か重たいものが乗っかってきた。

「キヤア！！」

思わず尻餅をつく。

「イタタタタ……な、何？」

目を開けると、私の上には緑の髪の見慣れたあの娘こがいた。

「アハハ……マジ？」

彼女は体を起こした。

そしてバツチリ目が合って・・・

「ウソー!!!」

余りの大声に、彼女はビククリしていた。

「あの……大丈夫ですか？」

「喋った!!」

私、何が何だか分からない

「とにかく初めまして!!私は初音ミクです」

凄く綺麗な声で、自己紹介をするミク。

「は・・・初めまして。わ・・・私は鈴音レナ。でも、なんでミクが・・・」

「さあ?私も良く分かりません。でも・・・凄く暖かくて、なのに悲しいカンジが一杯伝わってきて・・・それで」

「こうなっちゃった?」

「はい」

私はフウ、と一つ溜息をつく。

「ねえミク、敬語じゃなくていいよ?だって同じ16じゃない。・・・16だったよね」

「あ、はい」

「敬語禁止」

「はい・・・じゃなくて、分かった」

「よし!」

私はこけた拍子に倒れた椅子を起こす。

「で、ミクは戻れないの?」

私はパソコンを指差して言った。

「どうやって出てきたかもよく分かんないし・・・戻り方はサッパ
リ・・・」

「アハハゝ マジ？」

コクリとミクは頷いた。

「・・・お母さんに言つとこ・・・」

CD-ROMを取り出して、パソコンの電源を切る。
私はミクの手を引っ張って、下におりた。

「おかーさん」

「何？レナ・・・って、誰！！？」

私の後ろに居たミクを見て、きょつがく驚愕する。

「あの・・・初めまして。初音ミクです」
「え？」

お母さんはジーとミクを見つめる。

「ホントだわ・・・」

お母さんには既にミクについて話してある。買ってもらったときに言っ
つといてよかった。

「でも、どうして？」

「簡単に言つとね」

「こしよーりやく!!」

「んーなるほど。分かったわ。じゃあ、しばらく一緒に暮らす？」

「え!?!」

「いいじゃない。戻り方分からないんでしょう?それに、賑やかに
なつていいじゃない」

「私は別にいいけど・・・ミクは？」

「私も・・・別にかまわないけど・・・」

「じゃ、決定ね!」

あ、今更になつてだけど

うちは母子家庭で父さんは居ない。

私がまだ小さい頃に離婚しちゃったんだって。

「さあ、忙しくなるわね」

「え?」

お母さん?どこ行くんですかー?

そんな事を思っていたら、もうどこか行ってしまった。

「ちよつと散歩でもしにいこっか?」

「うん！」

私は鍵をかけてから、家を出た。

「わぁ・・・外はこんな物があるのね」

「外にはって・・・中には何があるの？」

「電腦世界にもお店はあるの」

ミクは小さく笑いながら言った。

嗚呼・・・カワイイ！！

「あ、レナレナ！あれ何？」

ミクが私の袖を引っ張る。

「あれは学校。りゅうおん流音高等学校。私が通ってる学校」
「学校・・・」

ミクにとっては珍しいのかな？

「ちょっと行ってみよっか」

「え？」

ミクが何か言う前に連れて行った。強制的に。

門は開いており、簡単に入れる。

部活をやってる人が、チラチラミクを見てくる。

「レナ、どこ行くの？」

「クラス。ちょっと忘れ物取りに」

私はまず職員室へ。

「失礼します」

中を覗くと、何人が先生が居た。

「ん？鈴音さん。どうしたの？」

この人は椎名^{しいな}カンナ先生。
私の担任で、音楽の先生。

「ちょっと忘れ物しちゃって・・・鍵、貸してください」

「ええ。いいわよ。・・・あら？その子は？」

「は、初めまして。初音ミクです」

ミクはペコリとおじぎした。

「友達です」

「そうなの。仲良くな。はい、じゃあ鍵ね」

渡された鍵を持って、職員室を出た。

「ミク、あの人音楽の先生なんだよ」

「そうなんだ。いい先生？」

「うん。すつごく話が弾む」

ミクと話しながら、自分の教室のある2階へ上がる。

教室の鍵を開けると、自分の机に一直線に向かう。

「これが教室……」

いくつかの机に、黒板。

ミクはどこか楽しそうに教室内を見渡す。

「あつたあつた」

私は手にノートを握っている。

「それ？」

「うん。じゃ、帰ろっか」

教室の外に出たと同時に、人にぶつかった。

「「キャッ!」!」」

持っていたノートを落とす。
つかイッタ……

「ちよつとお!どこ見て歩いてんの!」?

「ご、ごめんなさい!」!

「あら?あなた確か……鈴音さん?でしたっけ」

「あ、うん」

目の前に居たのは同じクラスの、まあ俗に言う美少女だ。
名を雪村 玲奈^{レイナ}。

「ごめんね雪村さん」

「別にいいですわ」

性格は・・・悪い。

「あら？これは何かしら？」

「ちょッ！！見ないでよ！！！」

私のノートをパラパラとめくる。

「何コレ？楽譜？アツハハハハハ！！！！音痴のあなたがこんなモン持ってたって意味無いじゃない！！！」

玲奈はノートをポイツと捨てると、さっさとどこかに行ってしまった。

「レナ・・・」

「大丈夫だよ」

私はミクにニツコリと笑いかける。

「気にしないで。私が音痴なのは確かだもん」

「そんな事ないよ！！！」

ミクは声を張り上げた。

「レナだって綺麗に歌えるよ！！！」

ミクの声は私の何かに振動した。

「・・・ありがとう、ミク。元気が出たよ」

「レナ・・・」

私はスックと立ち上がる。

「帰ろっか」

家に帰ったら、既に母さんが帰ってた。

「あ、お帰り。レナ・ミク。どこ行ってたの？」
「ガッコ」

レナは、そんなことよりも、母の傍に置いてある大きな袋が気になった。

「お母さん・・・それ何？」
「ミクの制服」

「は？」

あの、お母さん？何ていいました？

ミクの制服？

え？

「ミクも学校行ってみたらうって思って。いいわよね、ミク」

「はい！とってもうれしいです！！」

「って、ちよつとまったー！！学校には言ったの！？」

「ええ。ゴールデンウィークGWから通えるようにしといたわ」

我が母ながら、凄い行動力だ。

「とにかく、夕御飯の準備しましょうか。レナ手伝ってね」

「はーい」

ミクも手伝ってくれたから、早くできたー

って、まだ6時なんですけどおー！！？

初音の学校

え〜と・・・どうも、鈴音レナです。

只今GW明けの登校日です（早！！）
朝からもうバタバタです。

え？なんでかって？

そりゃあ、初音ミクの初登校日なんですから・・・

白と黒を基準にした制服。
りゅうおん

流音高校の制服はなんといってもカワイイ！！ことで有名だった。

「ミク、似合ってるよ」

「ホント？ありがとう！」

ミクは嬉しそうにクルリと回った。

「じゃ、いこつか。早くしないと遅刻しちゃうから」

1階まで降りて、机の上にある弁当箱をカバンの中に入れる。

「じゃ、お母さん、いってきまーす」

「いってきます」

「いってらっしゃーい」

私とミクは一緒に歩いて登校。

よく見れば、道行く人が私達を見ている。

いや、ミクを・か。

「ミクー」

「なに？」

「カバン、開いてるよ？」

「あ」

手に提げていたカバンを持ち直して、歩きながら閉める。

あ、ついでにミクは手提げカバンだけど私はリュックタイプ。

元は同じだけどちょっとした備品をつければリュックや肩掛けになるんだ。

まあ、とにかくにも学校到着

「ミクは先に職員室行かなきゃいけないんだっけ？」

「うん。私、レナと一緒にのクラスだったらいいな・・・」
「そうだね」

私はニツコリ笑いかける。

「じゃ、私行くね」

「バイバーイ」

ミクは手を左右に振って見送ってくれた。

｝class room｝

カリリ

教室に入って、自分の席に着く。
と、ここで耳にした話。

「ねえ知ってる？今日転校生来るんだって！！」

「え！マジで！？どのクラス？」

「それがクラスは今日決まるんだって」

「へー。あ！それって女の子！？」

「みたいだよ」

「イヤッホー！！美人だったらいいのになア！！」

ああ、ミクの事か。

「私、そのコ見たよ」

私はイスから立って、みんなのトコに行く。
つーか見たってゆーか一緒に来た。うん。

「え！？マジ！！？どんなコだった！！？」

「すつごく美人。チョーカワイイよ」

その瞬間、男子のボルテージがMAXになった。

「鈴音ー！！それマジでー！？」

「うん。ついでに声も凄くキレイだった」

うつわゝ・・・クラス（の男子）がうるさくなった・・・。

と、ここで先生登場！！

「みんなうるさいわよー。さ、席に着いて」

カンナせんせー！！（馬鹿）

「今日は嬉しいお知らせがあります。なんと、今日からウチのクラスに新しい仲間が来ました！！」

え？

あのゝ・・・なんておっしゃいました？

「・・・え？ミクが・・・来るの・・・？」

思わず口に出してしまった。

「え？何？レナもしかして名前知ってるの？」

前に座っていた友達の水野彩音あやねに聞かれた。

「・・・あは」

言わないでおこう・なんて思ってたのに

あゝー！！私の馬鹿！！

「ああ、そういえば鈴音さんはもう知ってるものね」

カンナさん？

そんな事言われたらもう苦笑いするしかないじゃーん。

「えー！！ズルイよレナア！！」

「だって彩音、なんか言ったら言ったでその……アレじゃん！！」

「アレでもコレでもズルイ！！」

他のみんなも騒ぎ始めた。

「せ……先生ッ！！早く入ってもらいましょう！！うん！！」

「それもそうね。じゃ、入ってください」

私は彩音をなだめつつ言った。

先生、やっとこのくだりにいけた事、感謝いたします。

「し、失礼しますッ」

ミクはちよっぴり緊張しながらも、入ってきた。

「じゃあ、早速自己紹介をお願いします」

「はい！えーと、初音ミクです。これからどうか、よろしく願います」

ミクがペコリと頭を下げると、拍手と「カワイー！！」などの声が聞こえた。

「じゃあ、初音さんに質問がある人は？」

「はい！！」

真っ先に彩音が手を上げた。

「好きな食べ物は何ですか？」

「ネギです」

一瞬、クラスがシーンとなった。
そりゃそうだろう。ネギって……

「じゃ……じゃあ、好きな色は？」

今度はクラスの男子が。

「緑です」

「好きな歌手は？」

歌手って……

どーすんの！？ミクー！！！！

「好きな歌手はえ〜と……カイトお兄ちゃんとメイちゃんとり
ンとレン……かな？」

オールボカロー！！って、当たり前でした。

「じゃ、スリーサイズ……」

ある男子が言おうとした言葉に、ミクがどこからともなくネギを投げつけてきた。

てか、誰もボカロー家にツッコミしないの？

「ミクー！！？そのネギどっから持ってきた！？」

「えーと・・・冷蔵庫？」

「イヤ！そうじゃなくて！どこに隠してたの！？ネギ！！」

「カバンに折り畳んで・・・」

「あー、やけにネギくさいと思ったらそれかー・・・って」ラッ
！！！

ネギは持つてきてもいいけどせめて切ってパックかなんかに入れて
きなさい！

なーんて叱ってます。

「あはは・・・とりあえず、初音さんは鈴音さんの後ろね」

「はい」

え？私の後ろ？ヤッター！！！！

「えへへ、レナの後ろだ」

ミクのコレ に男子共危険信号発してる・・・！！
絶対倒れちゃうー！！

「じゃ、朝のSHR始めます」
ショートホームルーム

先生からのお知らせが少し。

で、今は一時間目の休憩時間。

「ねえねえ、初音さんってどこから来たのー？」

「この髪地毛？」

「すっごく声綺麗だねー！！」

等と女子軍団に囲まれている。

あ、質問に答えられなくてオロオロしてる……。助けてあげなきゃ

「もー皆！ミク困ってるよ!？」

私はみんなの後ろから声をかけた。

「レナ」

半泣き……。あ、男子一人死んだ。

「みんな順番にね。ミクは聖徳太子じゃないんだから……。シ
ョートしたらどうするの!？」

「そ……。そうだね」

あ、言い忘れてたけど

私コレでも剣道とテコンドーやってます（笑）
え？部活？帰宅部

「イタイイタイ!!石投げないでえええええ!!！」

「うわぁ!?!どうしたのレナ!?!？」

「いや、ゴメン。なんでもない」

彩音はメチャクチャ驚いていた。

うん、ゴメンネ。

「てか、一時間目何？」

「数学」

「消えるオオオオオオ!!！」

数学大嫌い

「?レナって数学嫌い?」

「何言ってんのミク!嫌いじゃなくて大ッッッ嫌い!!」

「どうして?おもしろいのに」

「おもしろくなあああい!!」

ここで私、ある事に気がつきました。

ミクはボカロ。

つまり……

ボカロ

ボーカロイド

唄うロボット(?)

ロボット(?)

(絶対頭イイじゃん!!)

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。

ついでに、この時点で早退した男子は5人。

鈴音の決意（前書き）

とっってもお久しぶりの投稿です。

いやあ、久々だ！本当に！！

エーンド

スイマセンデシタあああああああ！！！！（スライディング土座）

鈴音の決意

大嫌いな授業が終わり、ようやく放課後だ。

「うあゝ・・・疲れたよあゝ・・・」

机に突っ伏した拍子に机からシャーペンが落ちた。鮮やかな緑のシャーペンがなぜか眩しい。

「レナ！帰ろうよ！」

ミクが拾い上げたシャーペンをレナに渡しながら微笑んだ。
本当にかわいいなあゝゝゝ！！

「うん。帰ろう」

「ってこゝらッ！なに私忘れてんのよ！！」

親友の水野彩音^{みずのあやね}が私の頬をつねった。

「いひゃいひゃいひゃい！！わしゅりえてましえんかりゃ！！！」
^{いたいたい}

横に引っ張られたから、イミフな言葉になっていた。

そこで私は気がついた。

「ありえ？あや^{あやね}にえつぶ^{あやねぶ}かちゅは？」
^{あれ}

彩音はパツと手を離し、答えた。

「いーの！どうせ文化祭なんてまだ先じゃん？」
「『文化祭』？」

話を聞いていたミクが不思議そうに聞いてきた。

「そっ！文化祭！！私、軽音楽部入ってるからね！」

そう、彩音は軽音楽部に入っている。

歌がとても上手いんだ。私の親友は・・・ね。

部活に入部した時から先輩達に「期待の新人だ！」って言われてた
っけ。

「彩音はね、すごく歌が上手なんだよ。あとベース弾^ひける」

「ギターじゃないんだ」

「ふふ〜ん、ギターはレナの方が上手だよ」

そうなんですよね〜。

覚えてる方は居ないと思うので今一度言いますが、私は剣道とテコ
ンドーができます。

それでもって私は音楽LOVE！なのでギターをやってます。

「へえ〜！じゃあ、2人そろえば何でもできるねー！」

「うん。何でもできるよ」

彩音はどこか誇らしそうに言った。

（私も、そう言ってくれたら嬉しいな・・・）

カバンに必要なものだけつめる。

基本『おきべん』してるので、カバンは軽い。

（それにしても・・・だ）

今日、男子だけではなく女子も何人かが倒れた。

ミクの可愛らしさは男子だけではなく女子にも影響を及ぼした。

だが、無事生き残った男女がミクに「一緒に帰ろう」くらい言うてもおかしくないのだが。

（ただ単にそんな事ができるような勇者がいらないだけだ）

「・・・・・・・・・・で・・・・・・・・・・よね・・・・・・・・・・」

「ほ・・・・・・・・・・ち・・・・・・・・・・だわ・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・！そ・・・・・・・・・・」

廊下から話し声が聞こえる。女子3～4人程度だろうか？

彩音もミクも、思わずそちらに目をやった。

・・・・・・・・・・こちらに近づいてきている。

軽やかな音と共にクラスのドアが開いた。

「ああ、誰かと思ったら鈴音さんに水野さんに転校生さんじゃない
い」

雪村玲奈^{ゆきむらいな}・・・・・・・・・・コイツ、ホント嫌いよ。私。

「あら、雪村さん・・・・・・・・・・ご機嫌麗^{うきげん}しゅう、とでも言えればいいワケ
？側近連れてなんのご用かしらね」

彩音も大分嫌っている。コイツ、顔はいいくせに性格悪いからなあ
。それに、学校への寄付金がハンパじゃない。

だから、教師達も頭が上がらないんだ。

「側近とかあゝチヨー！カンジわるいつてかんじいゝ！！」

おい、オマエ今「かんじ」を2回使ったぞ。意味は違う（？）けど違和感しかねえぞ。

「ほおんとお！チヨコ達がかわいいからつてえ、嫉妬しつとはよくないお」

一人称「チヨコ」ってどーよ？明らかにきもいぞぶりっ子。

・・・・・・流石に、コレにはミクも引いてる。

気持ちは分かるよ。ホント。正直玲奈以外は顔もそこまで良くない。

・・・・・・ついでに体系も。

「ねえ・・・・ねえ！レナ！」

「なに？」

ミク・・・・・・いま2回「ねえ」って言っちゃったぞ。

（だが君ならカワイイからおk！！） 心の中で大絶叫。

「ええつと・・・・クラスに居たのは分かるんだけど・・・・・・えと」

「はいはあゝい！レナ・ミク、帰ろうか！！」

もう皮肉すら言う暇なく教室から立ち去った。

「・・・・・・・・なんなのよ」

「メツチャむかつくぅ〜〜〜！」

「ほおんとお！なんなワケ？あの態度お！〜！」

玲奈達はそこに取り残された。

ポツリと夕日の差している教室に、置いてけぼりにされた。

「なんなのよ・・・・・・・・」

どこか悔しそうな玲奈の呟きは教室に吸い込まれていった。

「まってよ彩音!!」

「彩音ちゃん!!」

私とミクが彩音の制服を掴んでとめてから息を整えた。

「ああ、ゴメンゴメン。イラついてて」

彩音は本当にいいコなんだけど・・・イラつくと色々と行動が速くなる。

特に早歩き・・・が、いい例だろう。

「で・・・えつと・・・」

「名前？」

「うん」

私が尋ねれば、コクリと頷いた。

(あああああああ!!! ホントにかわいいよお!!!!!)

基本馬鹿なんので

「タカビーだったのが『雪村玲奈』。お嬢様だよ」

「お嬢様・・・？」

「そ。で、ギャルが『美原月』。ぶりっ子が『琴羽千代子』だよ」
ルナ ちよこ

「月さんに千代子さん・・・」

「いわゆる、DQNの塊かたまり、よ」

彩音・・・

言うねえ（笑）

「クラスメイト・・・だよね？」

「そうだよ」。男女問わず嫌われてるけどw」

背負いなおしたカバンから、ケータイを取り出して、イジる。
スライド式携帯で、色はライム。

「あんまり関わらないほうがいいと思うよ」
「そう・・・・・・・・そっか・・・」

しばらくワイワイ話しながら歩いていた。彩音と分かれて、家へと帰った。

ミクのあの表情かお・・・気になるなあ。

部屋に入ってから気づいた事があった。

ウチは元々一人っ子で、どちらかといえば広めの部屋を貰っていた。

ロフト付きの部屋は私にとってお気に入り部屋だ。

私は基本、そのロフトの上で寝ている。

結構スペースは広く、6畳ほどある。

ついでに、畳の間だ

と、するとだ。以外に下はスペースが広くある。
そこにいつの間にかソファアが置かれていた。

「なんでだあああああああ！！！！」

カバンを叩きつけてしまった。

シャー芯が折れないことを祈るところ。うん。

「いつの間に置いたのよお！？つか『前私のソファア』は！！？」

先ほど、『いつの間にかソファアが置かれていた。』としたが、実際はソファアはあった。

前々からレナの部屋にはソファアがあった。

だが、それがピッカピカの新しいソファアとチェンジしていたのだ。

「ああ、騒がしいと思ったらそれね。勝手に替えたわ」

「ちよつとおおお！？何勝手にやってんの！？」

「それ、ミクのベットにもなるから」

「ありがとうございますお母様」

ズサァーつとスライディング土下座。

考えても見ろ。

あの初音ミクと一緒にの部屋で寝られるんだぞ？

「これほどいいことが今まであったか・・・！！」

「レナと一緒にのお部屋？えへっ嬉しいな！」

「私も嬉しいよ！」

母は、（やれやれ）という顔をしながら、「まだ晩ごはんまで時間あるからね」とだけ言って出て行った。

と、母が出て行ってから気になったのだが、『何故誰もミクに気づかないのだろっ』ということだ。

母は気がついたようだが・・・。

「レナ？どうしたの？」

「うっん？ちよっとねえ」

「？」

ロフトへヒョイッと飛び乗り、ノートパソコンを開いた。
ミクも上へ上がってきた。

「どうしたの？」

スタンドの電気を点けながら聞いてきた。

「ほら、今日さ誰もミクに気がついてなかったでしょ？」

「うん・・・。何かおかしいの？」

「うっん。ウチのクラスでも『初音ミク』を知ってる人は何人も居るんだよ。それなのに、気づいてないから・・・気になって」

立ち上げて、音楽ファイルを開く。
ここには大好きなボーカロイドの曲がタップリと・・・。

「え？」

ない

ないないないないないない

ないないないないないないないないないないないない！！！！

「ボカロの曲が一曲もない！！？」

「・・・え？」

これにはミクも驚いているようだ。

画面の中にいつもならば表示される曲の数々が、今は一切無い。
他のアニソン・キャラソン・その他を開いてみるが、そちらは消えていない。

「どうして・・・？」

ポカンとしたミクの声が聞こえて、私は直ぐにファイルを閉じ、インターネットへ繋ぐ。

開いたのは『youtube』。ボーカロイド・と打ち込んで、確認する。

検索には何も引つかからなかった。

「消えてる・・・」

『ボーカロイド』という存在が、世界から消えた

「そんなッ・・・！お兄ちゃんは？めーちゃんは？リンちゃんは？レン君は？ルカさんは？」

「お・・・落ち着いて・・・！」

「グミちゃんやぐぼさんやテトさんも・・・！！」

「ミク！！」

「みんな・・・忘れられたの！？消えちゃったの！！？もう居ないの！！？」

「忘れてない！！」

ミクの肩を掴んで私の方を向かせた。

「忘れてないよ・・・私が忘れてないよ！！」

「・・・っ！」

「お母さんだっけ忘れてない！皆のこと、ちゃんと覚えてる！！」

ゆっくりと息を吸い込んだ。

「ミクだっけ、覚えてないでしょ？だから、『ここに居たのは確かだよ』」

落ち着いたミクは肩から力を抜いて、レナの方を真っ直ぐ見た。

「そう・・・だね。うん、そうだね！」

ニッコリと笑ってくれた。
よかった。

「でも・・・なんでだろう・・・」

考察にふける。

ミクが『ここに居る』という事はきっと関係があると思う。

ミクが『三次元』にいるせいで『二次元』の初音ミクが消えた。それが少なくとも関係しているのなら、話がつく。

「ミクが・・・ミクが『二次元に戻る方法』を探そう？」

「え？」

「そうすればきっと・・・きっと皆帰ってくるよ。皆の記憶の中に」
「本当？」

「ホントホント！！きっと大丈夫！何とかなるよ！！」

一瞬・・・ホントに一瞬、悲しそうに見えた。

「うん、ありがとう。レナ」

絶対、皆のところに帰してあげる。

絶対に、皆のところへ。

無限の歌の世界へ

私とミクの数ヶ月が、本格的に始まったんだ。

鈴音の決意（後書き）

次はいつかな

鈴音の幼馴染（前書き）

今回もグダグダだぜい！

鈴音の幼馴染

6月

雨がよく降る季節になった。

今日も朝からよく雨が降っている。

そして……………

「傘忘れました!！」

「バカかあああああ!!!！」

ドーンっと、彩音にカバンでぶたれた。

……………体って、ホントにぶっ飛ぶもんだね。

「レナ…………だから濡れてたの?」

「面目ない……………」

まあ、実はですね?今AM8:30なワケですよ?

登校時間なんですよ。

(ぶっちゃけ遅刻ギリギリでした)

で、走ってきました。

傘差さずに。

「それがバカだつていうのよバカア!!!」

「なっなにも2回も言わなくても・・・ッ!」

バカバカ言いつつも、タオルで頭をわしわしと拭いてくれる。
彩音ってホント・・・

「おかーさん属性だね」

「何急にワケわからんこと言っとんじゃ」

頭にチョップされました。
地味にイテエ。

「あ、じゃあ帰りは一緒に傘使おうね」

「あはは・・・ありがと、ミク」

何度も言っているが、もう一回言わせる。

(ミクかわいいよおおおお!!!!)

と、そんなことを考えている時だった。

「なあなあ、レナ!」

「ん?なに?」

男子の一人が話しかけてきた。

佐藤 旭あさひ・・・という名前だ。
所詮、幼馴染である。

顔?中の上だが上の下にはいかない位だろう。
つまり、悪くない。

「あのさ、レナって、初音と仲良いじゃん？」

「・・・そう、だけど？」

「だからさ、歓迎会にオマエが誘ってくんね？」

えー？

「どうせクラス全員誘うつもりだしさ！場所もココ使っし
・・・」

「なっなんだよ！その目は！！」

ジーーーーと怪しい目を向ける。

「レナ？」

「どうかした？」

ミクと彩音も私の行動が理解不能らしい。

「ああ、彩音、ちょっと・・・さ！」

それだけで何を察したのか、彩音はミクを連れて離れていった。

「おい旭・・・いやッ佐藤！！」

「なんだよ急に！苗字で呼んで」

「ミクがまん前に居るんだからジ・ブ・ンで！！誘えよ」
「うっ！！」

皆様はきつとすぐ気づいたと思うが、ミクがまん前にいるのに、この会話はおかしいだろう？

「ミクが何故か気づかなかったのは彩音と話していたからという」とで・・・」

「それは知ってるけどな」

「とにかく、恥かしいだけだろう」

「グッ」

顔を真っ赤にして若干俯いてしまった。

知ったこっちゃねえけどな

「自分で誘いな、シャイボーイ。やるまえから諦めてんじゃねえよ」
「何キャラだよ」

旭は『元、初音ミクを知っていた人』だ。

ぶつちやけ言えば、結構あの声に惚れこんでいた。

見た目にも

「いいかぁ!!ミクがかわいいのはなあ!全員が知ってんのよ!!」
「レレレレレ、レナ!!?」

後ろでミクの声がしたが、動くわけにはいかない。

べつ別に!抱きつきたいとかそんな不埒なこと、考えてないからね
!?

「ちよっレナ!」

「レナ様とお呼びなさい」

「イヤだしww」

「ならば・・・」さあ、ひざまづきなさい!!--!」

「リンかぁ!!?.....て、あ?」

旭の一言に、私もミクも驚いていた。

「リンって.....誰だっけ?ま、いつか.....とりあえず、な?」

「.....分かったわよ」

「.....?」

急に素直になったレナを旭は不審に思った。

カラッ

軽快な音を立てて教室のドアが開いた。

「あっさっひくくん!!おっはよ」

「げっ!!ことばね琴羽.....」

うわぁ、旭のヤツ、明らかに嫌そうな顔した。

「えーやだぁー!チョコって呼んで?」

「死んでも断る!!」

「死んだらチョコのキスでおこしてあげりゅ」

「やべえ!今ここ(教室は4階)から飛び降りろって言われたら飛び降りれる!!」

とかやってる時にレナは彩音とミクのところへ移動した。

「ちょ、レナw旭君死ぬぞマジで」

「いいのよ、アレは。関わりたくないわ」

「レナって・・・思った以上に冷たいんだね」

「うふふ。何言ってるのミク。私、フェミニストだもん」

「女がそれいうかあああああ!!!!」

旭の声が聞こえた気がしたが、スルー。

「おっはよ」

「・・・・・・チツ

嫌なやつ2号がきやがった。

「アレエ？チヨコ？何やってんの？」

月と書いてルナと読むやつがやってきた。

「チツ、DQNが来やがった」

「彩音ちゃん・・・目が笑ってないよ」

「笑えないもん」

「さすが大魔王」(ボソツ)

ガンッ

「わあああああ！レナア!!」

「ヤベッやりすぎた」

「つーか！俺はムシなワケ！？ねえ！！？」

「あさひくうくん」

「は・な・せええええええええええ！！！」

「お前らは・・・・・・・・いい加減にせんかあああああああああ！！！」

いつの間にか来ていた先生によって、このアホげたコントは終わった。

鈴音の幼馴染（後書き）

最終結果

- ・レナ：保健室送り
- ・ミク：若干の現実逃避
- ・彩音：先生に怒られた
- ・旭：（色んな意味で）死亡
- ・チヨコ：玲奈によって引き剥がされた
- ・月：スルー
- ・玲奈：ほぼ出番なし
- ・作者：眠い

雪村の瞳（前書き）

タイトルはいつも一番注目したい人物を入れるんですが、その後の『瞳』みたいな入れるのがいつも大変です。

雪村の瞳

前回のゴタゴタからやっとSHRに入れた。

「せんせー質問です」

「なんだ」

レナはスッと手を上げ、言った。

「カンナ先生をどこへやった」

「どういう意味だ」

「そういう意味だ」

「あ、レナは『椎名先生は今日居ないんですか？』って言いたいんだと思います」

彩音がフォローしてくれた。ありがたい。

「椎名先生は体調不良だそうだ。だから副担任の俺が来たんだ」

これは珍しい。

まだちょっとしかこの学校に居ないが、椎名先生が休んだのはこれが初めてだ。

私が学校に入学してから。

「レナ」

「ん？」

コソツとミクが話しかける。

「椎名先生って、あの音楽の・・・？」

「そうそう、音楽の・・・あ・・・」

しまった。忘れてた。

「今日は・・・今日は音楽があるのに・・・!!」

それを聞いた彩音がハツとした顔をした。

「セツせんせ!!今日の音楽はどうなるんですか!？」

「俺が・・・」

『ええええええ〜』

「オイコラ!そんなに俺が嫌いとお前ら!？」

クラス全員のブーイングに先生ちよっぴり涙目だ。

ざまあ

「だってさ、先生見た目体育系なのに中身超文系って・・・なあ
？」

旭が隣の男子に同意を求めた。

「確かに」

「俺、てっきり体育教師だと思ってた」

「ちくしょう、グレてやる」

どつと笑いに包まれた。

ミクがまた、話しかけてきた。

「おもしろい先生だね」

「・・・でしょ？」

「あの先生好きだよ。イジリがいがあって」

「でた、DS属性」

「前回おかーさん属性って言ってなかったか？」

たて一列に座っている私達は、クスクス笑いながら話していた。

「1時間目遅れんなよ」

先生が出席簿を机において、教室を出て行った。
さて、1時間目は・・・

「わーお、体育か」

「じゃ、行こうか」

「おう！」

私と彩音が立ち上がり、体操服と体育館シューズを持つ。
ミクもいそいそと準備を始めた。

5月中に必要なものは揃えておいた。流石我が母。

「ほら、はやく更衣室行こ！」

彩音がドアの前でせかす。

「あ！待ってよ彩音！」

「彩音ちゃん、早いよ〜!」

廊下を小走りしながら追いかける。
チクシヨウこの完璧女め・・・!!

「彩音ちゃんって・・・足速いんだね・・・」

「50メートル7.8」

「はやっ!」

更衣室は体育館の近くにある。

クラスごとに設けるといいう最高の学校だ。
1年が終わるまで私物化できる。

これぞ、我が流音高校のいいところだ。

ロッカーは皆結構好きに使っている。

まあ、例を挙げていこうか。

まずは私、鈴音レナは・・・

（ボカロ&アニメポスターやデコミラーがあっただが、ボカロのみ消
失した。チクシヨウ）

不自然に空間がある。

隠し持っていたCDが・・・!ああ!ボカロー!!

・・・ま、まあ次は彩音だ。

彩音はちよつとロック調・・・とでもいうのかこれは?

ミラーにはかっこかわいいドクロ。
それと、音符やらなんやらかんやら。

次は・・・あまり紹介したくない。マジで。

雪村玲奈のロッカーだ。

一言で言おう。

（シンプル！！）

特になんの飾りっ気もない。

あ、でもミラーだけは妙に豪華だ。チクショウ。

次は、美原^{ルナ}月。

（言わなくてもいいよね！？いいよね！？ただのそこらへんの女子
だよコイツ！！いろんな意味で一番マシだぜコイツ！？ほら、アレ
だ！！ジャーズだらけだ！！）

あとコスメかな？まあ、いいや。

最後、琴羽千代子だが・・・

まっピンクだ。そして・・・

（旭・・・可哀想過ぎるよ・・・旭・・・）

思わず涙が込み上げてきた。
だって・・・一面旭の写真（盗撮っぽいものも見られる）なんだから。

「あれは犯罪」（ボソッ）

「どうかしたのレナ？それに、皆行っちゃうよ？」
「なに！？」

ミクに話しかけられて気づいた。
彩音すでにいねえ。

「あと1分でチャイム鳴っちゃうし・・・」

「彩音コノヤロ！！置いていきやがってええええええええ！！行くよ！
ミク！！」

「あ、うん！！」

シューズを持ってダダダッと走っていった。

「じゃ、今日はバレエをやるわよ」

『はい!』

「その前に準備運動ね」

体操隊形に広がり、体操を始める。

もちろん、このままでは終わらないのがこのクラスの女子だ。

「あゝ・・・チョコ疲れたあゝ」

（オイ、まだ準備運動だぜ）

「もーだるいゝメンドイしいゝ」

（じゃあ帰れ）

ブツクサブツクサうるせえ。ぶっ飛ばすぞ。

（にしてもミク・・・そのピョンピョン揺れるツインテール。萌えます）

明らかに見る目を変えてミクを見る。

かわいいかわいいかわいい

ミクが琴羽と同じようなこと言っても許せる。多分。

（言っておく。差別じゃない。区別だ）

大体の事が終わったら、やっとバレエだ。

「レ〜ナ!ミ〜ク!一緒にやろう!〜!」

彩音がミクの背中に抱きついた。

ミクはちよっとびっくりしたようだ。

「おkゝ・・・あ、3人で大丈夫？」

「ミクが転入してきたからどうせ1人あまるよゝ」

ならいいか。

「あ、じゃあ私、ボール持って来るね！」

ミクは元気よく走って取りにいった。

もう、君なら何しても許せるよ。私。

「・・・にしても、不思議・・・・・・・・・・」

「ん？」

彩音はミクの方を見ながら話しかけてきた。

「ミクとはね、初めて会った気がしないの。不思議でしょう？」

スツと目を細めて懐かしむように言った。

彩音も、初音ミクを知っている人だ。

人だった。

「不思議・・・じゃないよ・・・」

「え？」

私も、少し目を細めていった。

懐かしむ・・・じゃなくて、嬉しくて。

やっぱりミクが居たという痕跡が沢山ある。
それが分かるだけで嬉しくなる。

「きつと、どこかで会ってるんだよ。覚えてないだけで」

「そうかなあ・・・」

「絶対そう!」

ニコリと笑う。

(全く、レナのそういうトコ好きだよ。私)

彩音がそう思っているとは思わなかった。もちろん知らず。
ミクがボールを持って走ってきた。

「遅くなって、ごめんね」

「いいよ。じゃあ、よろっか!」

3角形に広がって、練習を始めた。

「ちょっと、レイナ！？どこ行くの!？」

「うん、ごめん。ちょっと気分悪いのよ」

「なら・・・別にいいけどぉ・・・」

玲奈は遠くから3人の様子を見ていた。

今、玲奈の相手をしているのはルナなのだが、ルナには目を向けず、3人に目を向けていた。

(何で、こんなにムシャクシャすんのよ・・・ムカつくわ)

玲奈は体育館を出て、外にある水道まで来た。

蛇口を上に向けて、水を出す。

幾分か口に含み、飲み干した。

薬みたいな味がする。

「アイツら・・・見てなさい・・・」

目に暗い憎悪を灯しながら、体育館に戻っていった。

雪村の瞳（後書き）

まあ、頑張つて考えます。

佐藤の苦悩（前書き）

今回、無駄にテンション高いままで行きます。

ほんと、テンション高すぎておかしくなってます。

どうしよう

佐藤の苦悩

体育が終わってから、雪村玲奈は早退したらしい。

「ざつつつまああ！！k t k r！！フォー！！！」

・・・などと、声に出してしまうと流石にアレなので、心の中で大絶叫しておいた。

水野彩音が。

「やったあ！1人消えたぜザマーミロ！！」

「彩音く、アンタの心の大絶叫がここまで聞こえてきたよ」

「ごめん」

「許す」

只今昼休憩。

2・3・・・と、嫌いな教科（数学・英語）ときて、4時間目は好きでも嫌いでもない国語だった。

特に書くこともないので省略する。

描くことは多々あったけどね（笑）

まあ、その間玲奈が帰ってこないの、側近ルナ・チヨコが様子を見に行ったら、早退したとのことだ。

んでもって、冒頭になる。

「彩音ちゃん、あんまりそういうコト言つの、よくないよ？」

「ごめんミク。アタシもう絶対悪口言いません!!」
「感化されんの早ッ!!」

思わず、弁当を食べる手を止めてしまったじゃないか。

「あらア、何を仰っているのレナさん。私、暴言とか暴力とか嫌いですの」

「嘘つけえええええ!! 恐怖の大魔王が何言ってるのよ!!」
「誰が大魔王じゃああああ!!」

ドーン

「って、喰らうと思ったか! 馬鹿め!!」

「なッ・・・!? 私の剣(箸箱)を箸で受け止めただと・・・!?
そんなことが・・・!!」

「ふふふ・・・私も強くなっている、と言うことだ!!」

箸箱と箸で鏝迫り合いの対決になってしまったが、そんな中でもミクは笑っていた。

「クスクス・・・早く食べて音楽室行くんでしょ?」
「「そうだった」」

ミクに言われるまで忘れてた。次、音楽じゃないか!!

「ムッチー(副担任:室伏 淳^{むろふし あつし})ってゆーのが残念だけどね」
「いいじゃない。ムッチーおもしろいし」
「む・・・?」

「ああ、副担任のアダナ。旭命名」

旭とは、幼馴染の佐藤 旭のことだ。
その旭は、というと・・・

・・・まあ、昼休憩の憩いの時間にこんなこと報告してもいいのかわからないが・・・
チラリ、と旭の方を見た。

「あさひくうくうん」

「いいやあああああああああ！！！」

相変わらず、ことばね琴羽に追いかけているようだ。

「わあ・・・佐藤君、大変だねえ・・・・・・毎日？」

「そ、毎日毎日。これなら鉄板で焼かれたほうがマシね」

彩音の言うことに、激しく同意する。

・・・とりあえず、おもしろいので2人の攻防を見ながら昼飯をガ
ンガン進めていく。

「まあ！！なんで逃げるのおくく？」

「自分の胸に問いかけてみる！！」

「きゃー ムネと・かVV旭君のえつちい！」

「意味がちがあああああううう！！！」

「とにかく、止まってよお！！！」

「テメエが追いかけてくるからだろーがア！！！」

なんか、『銀魂』のノリになってきた。

あの、ダラダラと分が無駄に長く続くヤツ。

小説読んだ気になるよね（笑）

パシャッパシャッ

「!!!? テメエ、何撮ってんだア!!!」

琴羽が持っていたカメラをぶっ壊そうと（ココ大事）、もの凄い勢いでターンした。

のが、まずかった。

「旭くん！ やつとチヨコの方に来てくれあ~~~~！ 嬉しいにや」
「つとお危ねエ!!!」

琴羽の前でギョツとストップをかけて、止まった。
そして、まるで2次元のキャラクターのごとく、琴羽との距離をとった。

「クツ・・・！ あのカメラは取り返してえ・・・！ だが、危険が大
きすぎる・・・！」

「もおう、そんな、テレなくてもいいのにい〜」

「いっぺん眼科行ってこい!!!」

「えッ・・・」(ぽっ)

「なんで照れてんだああああ!!!」

どうしよう。

見ていて飽きない

オモロイオモロイww

ガチでおもろすぎるどうしようwww

「レナ、顔に全部出てるわよ」

「すっ………スマソ……私には……耐えられん……
ふははははははは……!!」

「笑ってんじゃねーよ!!レナこの野郎!!」

もちろん、華麗にスルースキル発動にございます。

「レナ!彩音ちゃん!そろそろ行く?私、準備終わったよ」

「OK、バイクで行こうぜwww」

「……え」

「いいのよミク。コイツぶっ壊れてるだけだから。さ、行きま
しょ。オラレナ、行くよ」

「いえっさー!BOSS!!」

「えっ……!?ちょ、待て待て待て!!置いてかないでええええ
え!!!!コイツ何とかしてくれええええ!!!!」

「他の男子にでも頼んでね。さ、いこ」

「うっい」

「うん!」

旭を置いて教室を出て行った。

く視点チェンジ S a t o | A s a h i く

「急にローマ字表記しても意味がねえwじゃないわ!！」

「旭君vチヨコのお、騎士^{ナイト}様になつてくれりゅう??」

「テメエのナイトになるんだったらゴキブリのナイトにでもなつてやる!！」

「え、じゃあ、私のナイトになつてくれるの!?うれしいにゃあ」
「どんなカン違いだあああああ!!!」

あまりにうつとうしいので、つつい椅子を投げてしまった。
イヤ、ホント衝動的に。

「きゃああ!」

「ヤバツ!!!」

流石にマズイと思ったので、もう一つ椅子を投げて阻止した。
琴羽には当たらなかった。

・・・水野の机には当たったケド。

(ヤベエ、バレたら殺される・・・ハッ!)

近くにいた友達を見れば、めっちゃ笑ってる。
しまった・・・！コイツの属性は・・・・・・・・！！！！

「あつちゃんに報告しとくねえ〜」

「やめてえええええ！！」

あつちゃんとは、水野のあだ名だ。

今笑ってるこいつは日野^{ひの}彰^{あきひ}。親友なんけども、結構な腹黒だ。
別に、いつもじゃないんだけども、好奇心旺盛というか何というか・
・・。

まあ、とりあえず、彰と水野は腹黒仲間で。

時々『他人が入ってはいけないような真っ黒トーク』を炸裂している。

「頼む彰！！ジューズ奢るから！！」

「ん・・・・・・・・？」

「・・・ジューズ+グミ！！」

「んんん〜〜〜？」

「・・・分かったよ！ジューズ+グミ+ジャンプでどうだ！！」

「グミマイナスしてオツケー」

「よっしゃああ！！」

なんとか難は逃れたようだ。

だが、俺は大切なことを忘れてたんだ。

（なんか熱い視線が・・・・！）

おそろおそろ振り返ると、髪を振り乱したモンスターが・・・

「旭君、私の事守ってくれたんだ・・・!」

「ゲッ!しまった!!」

そのセリフ、初音に言っただけ欲しかったなあ・・・

とか、考えてる暇ねえ!!

「あゝさひくううううん!!」

「たっ・・・助けて彰ア!!って、いねえ!!」

「あー、彰だったら先行ったぜ?」

「死ね!絶対奢ってやらん死ね!!」

・・・イヤ、やっぱり奢ろう。コイツよりも水野が怖い。

「つーわけで助けて悠人おおおお!!」

「こっちは来んなあああああ!!」

俺は近くにいた神崎 悠人に助けを求めた。

コッチは幼馴染。レナと一緒によくつるんでいた。

「やん!ナイトが2人イ!!」

・・・すっかり自分のことで忘れていたが、悠人も琴羽に追われている。

「ごめん!」

「許さん！」

「許して！」

「イヤだ！」

あああああ！！こうなりや最終手段！！

俺は教室の後ろにあるロッカーから、音楽の道具を取り出すと、悠人と共に教室を飛び出した。

「ああ！！筆箱忘れた！！」

「戻る気が悠人！！」

「貸せ！！」

「モチロンですッ！！」

遠くから琴羽の声が聞こえてくるが、振り返る気は一切無い。そのまま音楽室まで全力疾走をしていた。

佐藤の苦悩（後書き）

新キャラクター2名登場です。

旭の友達をスッカリ忘れるとこでした（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9657k/>

鈴の音

2011年11月29日13時46分発行